

# 中国古代喪服運用上における報について

谷 田 孝 之

## A Study of “Pao (報)” in the Case of Wearing Mourning Dresses in Ancient China

Takayuki TANIDA

### 緒 言

礼記大伝篇に、服術六ありとて、親々・尊々・名・出入・長幼・従服が挙げられ、更に従服は六つに細分されている。服術とは、家族・親族の身分関係を中軸とし、これに政治上の身分を加えて、喪服適用の原理を示したものであるが、大伝篇に挙げられた六つの術がこれら諸原理を網羅したものではなく、これに漏れたものにも重要なものがあり、とりわけ見逃してならないものは報服である。

報服は、直系親の尊属卑属相互を除いては、旁系親の尊卑間でも相互に同服を着用すべきことを規定したものであり、牧野巽博士は、妻妾が夫の親族に対する従服、旁系親に対してはその適庶の区別がほとんどないことと併せて、この報服の原理および事象からして古代家族制度を推察している<sup>1)</sup>。この様な意義をもった報服制も、更に細かく吟味するときは、色々の問題に会うのであり、これを一応解決しておくことは中国古代喪服制・家族制を研究する上で避けては通れないものである。従来これらの問題について幾多の研究が為されて来ているが、なお考察の余地が残されていると思われるので、以下いささか卑見を述べてみたい。

### 本 論

はじめに先ず、儀礼喪服篇経および伝に見られる報の記事を挙げておく。

#### A 経十二条

##### 杖期章

父卒、継母嫁、従、為之服、報

##### 不杖期章

為人後者为其父母、報

姑姊妹女子子適人無主者、姑姊妹報

大夫之子為世父母叔父母子昆弟昆弟之子姑姊妹

女子子無主者為大夫命婦者、唯子不報

##### 大功章

女子子適人者為衆昆弟姪丈夫婦人、報

##### 小功章

從祖祖父母從祖父母、報

從母、丈夫婦人報

夫之姑姊妹姪婦、報

##### 緦麻章

從祖姑姊妹適人者、報

從母之長殤、報

夫之諸祖父母、報

##### 記

為人後者於兄弟降一等、報、於所為後之子兄弟若子

### B 伝

##### 不杖期章

世父母叔父母、伝曰、世父母何以期也、与尊者一体也、然則昆弟之子何以亦期也、旁尊也、不足以加尊焉、故報之也、世母叔母何以亦期也、以名服也、

昆弟之子、伝曰、何以期也、以名服也、

夫之昆弟之子、伝曰、何以期也、報之也、

##### 緦麻章

甥、伝曰、何以緦也、報之也、

壻、伝曰、何以緦也、報之也、

姑之子、伝曰、何以緦也、報之也、

## (一) 報の原理について

a 報服と言えば相互同等の服を着けるように規定せられたものである。相互に同等服であるのが即報服であるわけではないが、同等でなければ報服は成立しない。相互が現実にも同等の服を着て葬喪し合うことはあり得ないことであるから、机上での規定にすぎないけれども、決して単なる空論ではなく、家族親族の身分関係を喪服によって規定せんとしたものであることは言うまでもない。

報服であるためには、まず相互に同等服を着けるのでなければならない。相互同等服であることが喪服制度の根本原理であり、相互に同等服でないのは、君臣関係は別として、直系尊属卑属の間だけである。家族的身分関係の中にも政治的身分関係が加わるものと純粋に家族的関係のものがあるが、後者の場合について見ると、直系の父子相互、祖孫相互にあっては、父に対して子は斬衰であるのに、父は適長子にだけは斬衰であるが、衆子に対しては齊衰不杖期であり、祖父母に対し孫は不杖期であるのに、祖父母は孫に対しては、適孫にだけは不杖期であるが庶孫に対しては大功、という風に、相互の服は同等ではない。程瑤田が「至親一脈之服、無所謂報也」と言い<sup>2)</sup>、夏燮が「尊加之服無報」と言う<sup>3)</sup>のがこれである。父祖に対し一方的服従の義務があって報例はないのである。

直系親の間に相互同等服がないのに対し、旁系親の間では左様ではない。齊衰不杖期章に昆弟とあるのは、昆弟相互の服であることは言うまでもない。大功章従父昆弟、小功章従祖昆弟、緦麻章族昆弟も同様であるが、同輩相互において喪服経文で報の字は全く使用されていない。同輩者相互同等の服が直ちに報であるかという点、これには議論もある。程瑤田は「報は旁親の間において存するのである」と言い、更に「昆弟相互服は報に非ず」と言い<sup>4)</sup>、夏燮も亦、「昆弟以下無報例」の項を挙げ、「報服は同等にして而も尊卑の序ある場合にまず卑が施し、後、尊者が報ずる」と言う<sup>5)</sup>。これに対し黄以周は「報とは旁尊卑の辞であるが、敵者が相互に服するのにも報と言うことが出来る」と言い<sup>6)</sup>、呉廷華も「緦麻章の従祖昆弟の子に対する服が族父の報服であることによると、同章の族曾祖父母、族祖父母、族父母、族昆弟は皆その対者に報ずるのである」と言う<sup>7)</sup>。昆弟相互間の服についてはっきり報服とせられているものとしては、唯一つ不杖期章に「大夫之子為世父母叔父母子昆弟昆弟之子云々、唯子不報」と記されているのが見られる。唯子不報と言うので

あれば、その余の者の間ではすべて報服がある。大夫の子とその昆弟の大夫たる者との間に報服がある。だがこれは昆弟間の相互服が即報服と言っているのではない。大夫の子とその昆弟の大夫たる者との政治的身分間係が条件として挙げられている（これについては更に詳述する）。昆弟相互、従父昆弟相互以下は本来の正服をもって服することは自明であり、報と言う必要はない（大夫の子の場合は特例である）。同輩間でも昆弟と姉妹との間になると名称が異なる上に女子出適があり、はじめて報の現象が生じる<sup>8)</sup>。経文での記載法としては、両者別々に挙げるか（この場合、伝が報と説明している）、又は一方だけを挙げて他方は報ずるとして相手の名称を畧す。例えば緦麻章の「従祖姑姉妹適人者、報」はこの一条だけで出適女子がその対者たる従父昆弟の子と従祖昆弟とに報ずることがわかる。又、大功章に、「姑姉妹女子子適人者」と「女子子適人者為衆昆弟姪丈夫婦人、報」との二条がある。両条を併せて見ると昆弟と出適女子と相互同服であることは報字がなくても明らかである。同一家族の同輩者であるが、称谓を異にしている上に出適という条件が加わって、報服とせられるのである。但し大功章のこの報については、なお検討を要する問題がある（後述）。

上に述べたように、直系親の尊卑間における如く、一方的に服従の義務がある場合は報はないが、その他では相互同服を以て一貫している。この相互同服を広義の報服と見るならば、広義の報の第一は昆弟同士であるが、「昆弟」と言えば昆弟相互の同等は自明であるから、特に報とは称せられない。

上の昆弟より族昆弟までの同輩行の旁系親だけでなく、旁系親の尊属卑属間の場合でも、旁系親相互は喪服経文には必ずしもそれらすべての服が挙げられてはいないけれども、すべて相互同服と見られ、且、報である。父世代と子世代との間では、不杖期章に世父母叔父母と昆弟の子とがあり（これが報であるか否かについては異議を唱えるものもいる）、小功章に「従祖父母、報」（従祖父母と従父昆弟の子との相互同服）があり、緦麻章に族父母と従祖昆弟の子とがある。祖世代と孫世代の間では、小功章に「従祖祖父母、報」（従祖祖父母と昆弟の孫との相互同服）が見られる等である。張錫恭が「凡在旁尊服、無不報」と言う<sup>9)</sup>のがこれである。而して尊属卑属間では報と称するか、或は対者別々に服を示している<sup>10)</sup>（勿論同等服である）。

b その他、報例として挙げられるものは、本服の他に、尊加の服、名服、降服、従服等が加わって、而もなお相互服が同等の原理にそむかない、或は本来無服であるのに服して、而も同等の原理に従うことを明らかにするために報とするものである。尊加服とは、齊衰不杖期章「世叔父母」の伝に「世父叔父何以期也、与尊者一体也、故報之也」とあるもの、名服とは、同条の伝「世母叔母何以亦期也、以名服也」や、小功章「従母丈夫婦人報」の伝「以名加也」の如きもの、降服とは不杖期章「為人後者為父母報」の伝「持重於大宗者降其小宗也」、又、女子出適によって本服より一等を降したもので、その例は大功章「女子子適人者為衆昆弟姪丈夫婦人報」総麻章「従祖姑姉妹適人者報」等であり、従服とは来嫁婦が夫に従って夫党に対して服するものでは、大功章「夫之祖父母世父母叔父母」の伝「何以大功也、従服也」小功章「夫之姑姉妹娣姒婦報」総麻章「夫之諸祖父母報」等があり、夫が妻に従って服するものでは、総麻章「妻之父母」の伝「何以總、従服也」（これに対し総麻章「壻」伝「何以總、報之也」がある）、母に従って服するものに総麻章「舅」伝「何以總、従服也」（これに対し総麻章「甥」伝「何以總也、報之也」）、総麻章「舅之子」伝「何以總、従服也」（これに対し、総麻章「姑之子」伝「何以總、報之也」）等がある。この他に、政治的身分を条件としたものに不杖期章「大夫之子為世父母叔父母子昆弟昆弟之子姑姉妹女子子無主者為大夫命婦者唯子不報」があり、感恩の報として、ただいま挙げた大夫の子の条の「姑姉妹女子子無主者」同じ不杖期章「姑姉妹女子子適人無主者姑姉妹報」杖期章「父卒繼母嫁為之服報」等がある。本来無服であるのに有服となるのは、例えば兄弟の妻相互である（小功章「娣姒婦報」）。又、己の直系の母を除いて旁系の母名ある者も本来無服である。なお、廣池千九郎氏は、当然本服を服するのは報に非ずと言うが<sup>11)</sup>、娣祖祖母や従祖父母が報ずるのは（小功章）本服であるから、氏の言は当たらない。

c 報服における服者被服者の先後について考えて見よう。報とは先に施すところがあって然る後にこれに報いるのである。そこで報服もこれに従って説かれるのが道理である。程瑤田「に喪服報例皆報其所施設」がある<sup>12)</sup>のがこれである。杖期章「父卒繼母嫁云々」の条の賈疏が「報者十有二、無降殺之差、感恩者皆稱報」と言うのも同じである。廣池氏が、この賈疏について、感恩の一事を以て報を説明するのは疎畧で

あると評するのは強ち不当ではないにしても、先ず施すものに対して報ずるものであるとの趣旨は賈疏によく現れており、この点賈疏は不当ではない。

尊属卑属間で何れが先に服するかと言えば、一般的には年多き者が先に死するのであれば、卑属が先に服するのであり、更にこの事は喪服が家族的身分関係を明らかにすることに大きな意義があるものであることは自明であるから当然のことである。現実において先に服した卑属に対し、尊属が後から報服することはないが、家族的身分関係の理念の上からは、尊属が己より先に死んだ卑属に対して服する場合でも報と意識せられるのである。郭明昆氏は「報の十二条は、相互に同等の喪服を服する場合、記述を簡単にするための書き方である、相互同等の服喪義務を有するものにおいて何れを所服者、何れを服者として条文の表面に挙げるかは、全く便宜的なことであって、深い意味はない」と言うが<sup>13)</sup>、果して左様であるなら、上述した尊加、出降、従服等は全く無意味となる。又、郭氏の説の如くであるなら、輩行を異にする者の間での報を記す場合に、或は尊属が報ずるとし、或は卑属が報ずるとする等、両者が経文に見られて差支えない筈であるのに、実は殆んど尊属が報ずるものとして記してある。ただ卑属が報ずるとの条文は二ヶ所ある。一つは不杖期章「大夫之子……唯子不報」において、子だけが報ぜず、その他の報ずるものの中に昆弟の子がある。これは同服の者が多数列举してあるため、記述の便宜上のことと思われる。他の一つは大功章「女子子適人者為衆昆弟姪丈夫婦人報」である。この経文はその他の報を記した経文を参照すると、姪丈夫婦人が報ずると読むことが出来るのであるが、これについて夏燮は、女子子適人者を以て報者とすべしと釈くが、これについては問題がある<sup>14)</sup>。この条文は大功章の首条の「姑姉妹女子子適人者」とあるものと照応するのであって、この首条は姑姉妹出適者のために衆昆弟姪が大功に服することをまず示したものであり、これに対し後の条は出適者の姑姉妹が衆昆弟に服するのである。この服が報であることは、はじめの条との関係から自ら判るのである。だから報字は必要でない様である。経に報とあれば、勿論、女子子出適者が報ずるのであることを念を入れて記したものと解釈されないことはない（夏燮がこの説をなしており、小功章「従母丈夫婦人報」と文体が似ている）。然し喪服経文で報が記されているものの文法から推すと、女子子出適者が衆昆弟姪のために服し、衆昆弟姪が報ずるものとも読まれ、両説が

可能となるのである。程瑤田も、姑姉妹が衆昆弟姪のためも報であり、衆昆弟姪が姑姉妹のためも報であると言う<sup>15)</sup>。武威漢簡喪服文において<sup>16)</sup>、甲本乙本は大功章の後の条を全く欠いているけれども、丙本にはこれが存する。そして丈夫婦人の下に報字がない。これによると、この読みは夏變の読みに近いのであり、女子子出適者が昆弟姪に報ずるのであり、姑姪関係では尊者が報ずるのである。もし姪報とするのであれば（馬融・鄭玄説）、これには特別の理由があるものとせられねばならない。

出適者と在家者との関係については、出適者が報ずるものとして、不杖期章「姑姉妹女子子適人無主者、姑姉妹報」、總麻章「從祖姑姉妹適人者報」が見られる。これは出適者が報ずる。なお前者は、出適者が無主（夫死し、子もない）であることを哀れんで在室者が不杖期に服するので、これに報じたのもある。不杖期章「唯子不報」の場合でも同じである。且、姑が姪に報ずるから尊より卑へである。大功章女子子適人者が衆昆弟姪に対するの条文では、先に述べた様に報字がない場合には出適女子子が報じたのであり、出適者の例に挙げたものと同趣旨で、己が先ず出降を受けたので、己も降を以て報じたのである。姪が報ずるとする場合には別の説明を必要とする。

在家者が報ずるものとしては、不杖期章「為人後者為其父母、報」、記「為人後者於其兄弟降一等、報」があるが、為人後者（小宗より出て大宗の後となった者）が先ず小宗を降した故に、父母或は兄弟服者がこれに報ずるのである。大功章「女子子適人者為衆昆弟姪丈夫婦人報」もその読み方の一つは在家者報の例である。男子小宗より出て大宗の後となった者がその父母のための服を降して不杖期とすると、女子子出適者がその父母のために不杖期とするのとは同じ趣旨によるもので、一は大宗のために斬に服し、一は夫のために斬に服するが故に、斬を貳にするを得ないのである。唯、大宗の後となった子に対して父母は報じ、出適女子に対しては父母は報ぜずして大功に服する。

ところで、小宗より出る者が小宗を降して小宗より報を受けるのと、小宗より出た者を小宗家が降すが故に出適者が報ずるのとの両方の文が存する上は、何れが基本とも為し難い様であるが、不杖期章「大夫之子……唯子不報」の文よりすれば、父が報ずることはあっても子が報ずることはないのであるから、父母に対しては出適の子が先に服することを以て家族制度上の理念としたものであり、それ以外に対しては出適者

と在室間の相互同等服は、同輩者に限っては先後をおかないものと考えることが出来るのではないか。尊卑間では卑者が先ず服し尊者が報ずるのが例である。

その他、夏變は、從服の報は從服者が先ず施すと言<sup>17)</sup>、李如圭も「凡為夫之党、尊者ニハ皆從服、卑者ニハ皆報之、從服故降其夫一等、卑者以名服、己与夫同、故己報之、亦与夫同也」と述べている<sup>18)</sup>。来嫁婦は夫党を重んずるが故に尊者及び同輩者に対して先ず夫に従って夫党の為に服するのである。これが從服である。小功章「夫之姑姉妹報」總麻章「夫之諸祖父母報」は来嫁婦が先ず夫の姑姉妹や諸祖父母に服し、それ等が来嫁婦に報ずるのである。不杖期章「夫之昆弟之子」については、伝がこの服は報服であると言う。即ち夫の昆弟の子が先ず世叔母に服し、世叔母がこれに報ずるのである。己は母の名があるので、夫の昆弟の子が己を尊重して、先ず己に服したのである。

名服については、夫の昆弟の子の条の賈疏の説に、世叔母は本来路人であり、母の名があるによって昆弟の子は期に服するので二母は報ずるのである。名を以て服せられる世叔母や從母が報ずるのであるから、名を以て服する者が先である。從服、名服においても卑者服し尊者が報ずる。

吳嘉賓は、先に施す服と報服との輕重を比較して、報を受ける方が輕いのであると見ている<sup>19)</sup>。尊属が報ずる場合は固よりこの通りである。昆弟の子のために不杖期である（不杖期章）。鄭注に「檀弓曰喪服兄弟之子猶子也、蓋引而進之也」と言い、賈疏は「引いて進めて己の子と同じくするのであるから、兄弟の子に対するの服は報ではない」と言う。これによって見ても報服は輕いのである。但し、昆弟の子のための期が報であるか否かは、なお問題である。女子子出適者が宗人のためには報であり、女子は夫党を重んじ小宗を軽くするがためであると吳氏は言うのである。然し報は先施服に対する報であり、出適者が先ず宗人を降すのは報ではない。又、先にも述べた様に、子は父母に對し報はない。

#### (二) 報服諸例中における問題点

前項で述べた様に、直系親の間において、卑属が尊属を尊敬し、これに服従することを以て根本の原理としているところの家族制度において、この直系親の尊卑の間に報服はあり得ないが、旁系親の間ではすべて相互同服を建前とする。これは礼記喪服小記篇に「上殺下殺旁殺而親畢矣」と称しているところの喪服による親等（これはヨーロッパの教会法式の母体となった



古代ゲルマンの計算法と似たものである)の特色である<sup>20)</sup>。ところが儀礼喪服篇において、五服内各親族がすべて記されているわけではない。その欠落の部分は省略せられたものであるか、或はそれなりの理由があつてそれに対し喪服を着用しないが故であるかは、不明のものも多い。それらの中の若干について考察して見ることにする。

#### a 昆弟の曾孫、従父昆弟の孫に対する服

總麻章に族曾祖父母、族祖父母、族父母、族昆弟が挙げられ、これ等に対するものは、昆弟の曾孫、従父昆弟の孫、従祖昆弟の子、族昆弟であり、これ等も勿論總麻親である筈であるが、経文では族父母に対する従祖昆弟の子が總麻章に挙げられているだけで、従父昆弟の孫、昆弟の曾孫は總麻章にその名が見えないばかりでなく、族曾祖父母以下が報ずることの記事もない。礼記喪服小記篇「上殺下殺旁殺」の条下の孔疏は、喪服経文にないところの昆弟の曾孫、従父昆弟の孫を、名称としては兄弟曾孫、同堂兄弟の孫としてではあるが、總麻親として補っている。これに対し程瑤田は、喪服経伝に逸文なく、失誤もないものとして、孔疏のこの補入を斥けた<sup>21)</sup>。程瑤田が昆弟の曾孫及び従父昆弟の孫に対して服がないとすることの理由は、「己の曾孫のために總麻である。(曾祖のために齊衰三月であるから、曾孫のためにその本服を降して總麻三月とするのである。)この總麻から旁殺して、昆弟の曾孫のために無服となる。応報の義を旁殺の義が奪った結果である。又これを殺し、従父昆弟の孫のために總麻であることができない」と言うのである。程氏が昆弟の曾孫のために無服と言うことの理由は判るが、従父昆弟の孫については全く説明になっていない。己の孫(大功)から旁殺して昆弟の孫小功(小功章に「従祖祖父母報」とある)、更に旁殺して従父昆弟の孫は總なるべきである。喪服小記孔疏もまず「孫大功、兄弟之孫服従祖五月、故従祖報之小功也、同堂兄弟之孫既疏、為之理自總麻、其外無服矣」と言う。これは兄弟の孫からの旁殺によって説いたものである。次に「曾祖為曾孫三月、為兄弟曾孫以無尊降之故、亦為三月」と言う。これは族曾祖父母は旁尊である故に尊降するの理がなく、報服として總麻に服すると言うのである。ここで昆弟の曾孫は曾孫總麻よりの旁殺からと、族曾祖よりの報によるのとで服が一致しないことになる。盛世佐は孔疏と同じように報によって説き「自族父母以上皆反服、不云報者、省文也、族父母為従祖昆弟之子服見下文、以是推之、則族父母之父若祖可知矣」と

言う<sup>22)</sup>。呉廷華も同説であり、鄭珍は更に曾孫小功(本服)よりの旁殺よりしても昆弟の曾孫は總麻であると言う<sup>23)</sup>。曾祖より曾孫に対する服が本服小功以外にないのなら問題はないが、降して總麻であるから、而も昆弟の曾孫に対する服が経文にないのであるから、旁殺が本服から降服からか論議せられる結果となる。旁殺は加服や降服より出発するのではなく、本服より出発するのであることは次のことから知られる。従祖祖父母のための服は、祖父母のための尊加服齊衰不杖期からではなく祖父母のための本服大功からの旁殺によって小功なのである。曾祖父母齊衰三月、族曾祖父母總衰の場合も同様に、曾祖父母は本服小功五月であるが故に族曾祖父母が總麻三月となる(礼記喪服小記孔疏参照)。これによれば鄭珍の言うように昆弟の曾孫のための服は、曾孫本服小功よりの旁殺と族曾祖父母の報と齟齬しないのである。先にも述べた様に、族父母が従祖昆弟の子に対する服が總麻章に挙げてあるのであるから、族祖父母、族曾祖父母がそれぞれ従父昆弟の孫および昆弟の曾孫に対し報服するものと見られる。程瑤田の言うように経文に見えないのは無服なるが故であるとは考えられない。旁殺の出発点が尊加服、又は降服からであるとする、旁殺されるものも尊加又は降を受けることになり、尊降の意味がなくなる。

#### b 来嫁婦と夫の党との間の報服について

##### ア、一般的服術

喪服経の記述は完備したものではないから、欠けているものについては他の記述から推論せざるを得ないのであるが、比較的問題なく推論し得るものもあり、問題多く容易にはそれが出来ない様なものもある。問題の多いものは来嫁婦と夫党との間のものである。

妻は夫にとって至親であり(齊衰杖期章伝)、又それと一体となるものである(齊衰不杖期章伝)。それが子を生んで母となり祖母となつてはじめて子孫からその父、祖父と並んで尊崇を受けるが、母として祖母としてでなく、即ち来嫁婦としては、夫党より、直系親からも旁系親からも常にその夫よりは低い扱いを受ける。

更に詳細には、夫党の男(存室女も同じ)は旁系上位世代者たる男子を称するに従や族等の記述詞を付した上で一様に父や祖父の称谓を用い、その配偶者を母、祖母と称して、それぞれ父や祖父に対するのと同等の服をつける。母、祖母等と称する以上は最早他族の婦人ではなく、族人と見られる。この上位世代来嫁婦に対しては、それと同じ世代の同宗女に対するのと同じで

ある。そこで母と呼ばれるところの来嫁婦はこれに依じて己の夫と同じ服を以て夫党の下位世代の男及び在室女に報いる。

下位世代者の妻たる来嫁婦は、夫党の上位世代者に対しては婦道を以て接するが故に、夫と同じ服を以ては服するを得ず、夫より一等を降して服する。即ち従服である。そこで上位世代者は下位世代の来嫁婦に対しては、その夫より一等を降した服を以て報ずるのである。(夏燮は、従服と報服との先後については、先ず従服し、これに対して報服があると言う。上述)。下位世代の来嫁婦に対する服は、宗女の出適者に対するのと等しい。同一世代者に対しては、夫の昆弟に対しては服をつけないが、夫の姉妹に対しては上位世代の場合と同じようにする。かくて、例として挙げれば、族曾祖父母、族祖父母、族父母に対しては、来嫁婦は夫より一等を降すから無服であるが、族曾祖母、族祖母、族母としては、母を以てすればその報は夫がするのと同じである。兄弟の曾孫、従父昆弟の孫、従祖昆弟の子に対しては總麻であり、その婦には無服である。

#### イ、夫之諸祖父母報（總麻章）について

妻と、その夫の従祖祖父母、従祖父母、従祖昆弟、従祖昆弟の子との間の服については、畧、問題はない。畧というわけは、夫の従祖祖父母、従祖父母について、経に明白には記述されていないが、これに極めて関係深いものが見られるからであるが、それは次の様に記されている。總麻章「夫之諸祖父母報」である。

諸祖父母とはどれを指すかという点、鄭玄の注に、「諸祖父母者、夫之所為小功、従祖祖父母、外祖父母、或曰曾祖父母、曾祖於曾孫之婦無服、而云報乎、曾祖父母正服小功、妻従服總」とある。この鄭注は問題が非常に多いが、兎も角この中に見える祖父母としては、従祖祖父母、外祖父母、曾祖父母の三者が見られる。この最後の曾祖父母については、或者が挙げたものについて、それを経文の「諸祖父母報」の中に包含することを鄭玄は否定しているのであるが、鄭玄の述べているこの或曰云々の文の中に誤字ありとの説があつて、経文の「夫之諸祖父母報」の注としてはこの文章のままではあり得ないとするのであるが、諸祖父母報からは一応切り離し、夫の曾祖父母と曾孫婦との喪服の関係についてはどうかという点をまず検討して見ることにしよう。

先に述べた様に、男はその曾祖父母に対し正服小功であるが、尊加して齊衰三月に服する。妻が夫の曾祖父母に対する服は経文には見えない。上掲の鄭玄の總

麻章の注に「曾祖父母正服小功、妻従服總」とあるのが見られるのであるが、賈疏はこれにより、程瑤田も「其夫為曾祖父母齊衰三月、妻或如夫之月數而従服總与」と言う<sup>24)</sup>。吳廷華、胡培翬<sup>25)</sup>、張錫恭等も同じであり、盛世佐は、妻は従服、夫と同じく齊衰三月としているが、張錫恭が盛氏を難じている様に、祖父母に対してすでに功服としているのに（大功章「夫之祖父母」）、更に遠い曾祖父母に齊衰三月を服することはあり得ない。夫の曾祖父母に対し妻の従服が總であることは間違いないと見るべきである。

曾祖より曾孫婦に対する服については、鄭玄が無服と言う通りである（孫婦に対しては總麻であるから、曾孫婦に対し当然無服である<sup>26)</sup>）。鄭玄が挙げている曾孫の婦に対する報服とは、鄭珍は馬融説であると言うが、通典凶四引馬融説の「妻為夫之諸祖父母服、所服者四、其報者二、曾祖正小功、故妻服總不報也、従祖祖父旁尊、故報也」によって見るに、馬融が曾孫婦に対し報とは言っていないにも拘らず、鄭玄はこれを排している。胡培翬は馬説は明晰でない、脱文があると言っている。

上の様に見てくると、總麻章の「夫之諸祖父母」の鄭注としての「或曰曾祖父母云々」なる文章の中に誤字があるかも知れぬが、この経文の説明ということとを離れて夫の曾祖父母との喪服関係のみについて見るならば、この注文を改めるべき必要はない。曾孫婦は夫の曾祖父母よりの報を受けないから、總麻章の本条の諸祖父母の中には含まれない。鄭注の「曾祖父母正服小功、妻従服總」の曾祖を段玉裁は外祖の誤字とし<sup>27)</sup>、程瑤田は従祖の誤りとする<sup>28)</sup>。曾孫婦の服を理解するための資料としてこの鄭注を改める必要はないが、夫の諸祖父母報に含まれるものとしては曾孫婦は中に入らないし、その様なものを鄭玄が挙げる筈はないとの考えから、上記二者が曾を外字又は従字の譌としたのであるが、鄭玄は或説の曾祖父母を先ず否定し、次いでそれを補足説明したものとも考えられるから、胡培翬も述べている様に曾字を訂正しなければ意味が通じないということはないのである。

鄭玄が夫の諸祖父母として挙げているものは「夫之所為小功、従祖祖父母、外祖父母」である。第一の従祖祖父母については、小功章に「従祖祖父母従祖父母報」とあり、これよりして妻が夫の従祖祖父母に対して従服一等を降して總麻に服し、又、報を受けることに問題がない。夫の諸祖父母の中に従祖父母が入るか否かは別として、前掲小功章の文よりして、夫の従祖

父母に対する服が従服總であること、そして總の報を受けることは、亦、疑義のないところである。唯、夫の諸祖父母の中に従祖父母を入れることの是非については、諸祖父母とは祖の輩行であり、従祖父母がこの輩行には入り難いとする者も多い。吳廷華、褚寅亮<sup>29)</sup>、段玉裁、胡培暉、鄭珍等である。これに対し入れる者は程瑤田の外に沈彤<sup>30)</sup>、徐乾學<sup>31)</sup>等である。

外祖父母については、小功章に「為外祖父母」があり、伝は尊加の故に外親のための總麻よりも上げて小功としたのだと説明し、總麻章に「外孫」がある。外祖父母は外孫に対し報をしないのである。然し鄭玄の本条の注によれば、外祖父母は外孫婦に対し總麻の報があることになる。これがあることのためには、まず、外孫婦が夫の外祖父母のために總麻服をつけるのでなければならない。これは夫の外祖父母に対する尊加服を本にした従服である。礼記服問篇「有従無服而有服、公子之妻為公子之外兄弟」の鄭注に「謂為公子之外祖父母従母總麻」とある。この言うところは、公子は己の母家のためには父君の圧を受けて降して五服外である（喪服記「公子為其母練冠麻云々」がこれである）が、妻は舅姑より圧を受けず<sup>32)</sup>、従って一般の妻と同じ服で夫の外祖父母のために服する。それは總麻である。この總麻は従服であり、夫の服より一等を降したものである。夫の服は小功で、これは尊加服であり、外親に対する本服總麻ではない。夫の外祖父母に対する外孫婦の服がこの様に夫の尊加小功服を本にした従服總麻であるとしても、直ちに外孫婦が夫の外祖父母から總麻を以て報せられるとするわけにはいかない。夫が外祖父母から報を受けないのに妻が報を受けるというのは不合理であるとも考えられるからである。然し鄭玄の總麻章の注では報を受けるのである。

上の様な鄭玄説に反対する者に程瑤田がいる。程氏言うのに「外祖父母、従母のための本服は總麻である。夫が小功に服するのは加服である。妻は夫小功によつての従服總であることは出来ない。夫の本服總によつて妻は無服である」と。程氏はこの事からして總麻章鄭注の外祖父母は従祖父母の誤りであるとし、四条を挙げてこれを証明している。その第一は、小功章「従祖父母従祖父母報」である<sup>33)</sup>。程氏説と同じく外孫婦が夫の外祖父母に対し夫の正服總麻より降して無服とする者に許宗彦がいる<sup>34)</sup>。然し、夫の世叔父母に対し大功であることは明文があり、これは世叔父母に対する夫の尊加服からの降一等の従服である。外祖父母に対しても尊加服よりの従服とすることは不可では

ない。又、吳廷華や夏燮は<sup>35)</sup>、夫が報を受けないのであるから妻が報を受けることはない、と言う。その他、敖繼公<sup>36)</sup>、徐乾學等、外祖父母を数えない。これに反し、鄭玄説に従って外孫婦が總の報を受けるとする者に沈彤、褚寅亮、段玉裁、鄭珍等がいる。鄭珍は「古人の服制は母家や女家のためには深い意味があって、本宗に対する服とは違うものがある。舅のために總に服し、舅の子のためにも亦總に服する等がこれである。祖が孫婦のために夫より二等降す様なものと同例ではない。故に、外孫のために總であるからとて、外孫婦に対しこれより降して無服とするようなことはない。政和礼、書儀、家礼、明会典、今律も並びに外孫婦のために總としている」と言う<sup>37)</sup>。開元礼にも總麻章に「為夫之外祖父母報」<sup>38)</sup>の条がある。なお、喪服記の「夫之所為兄弟服妻降一等」の賈疏は、妻従服の兄弟服として、夫の諸祖父母の外、外親従母を挙げ、凌曙も兄弟服に外親が含まれることを述べ<sup>39)</sup>、段氏も同様である。礼記服問篇の公子の外兄弟、儀礼喪服篇總麻章の夫の諸祖父母もこれと関係深いものであると思われる。諸祖父母の内に従祖父母と共に外祖父母があるであろう。劉師培が「外孫の妻に報するや否やは経に文がなく、鄭注は定解ではない」と言っている様に<sup>40)</sup>、總麻章の夫の諸祖父母報の中に、どれとどれを含むべきであるかは明白には言えないしても、夫の従祖父母、従祖父母、外祖父母の何れにも、妻は従服總に服すると思われ、昆弟の孫婦、従父昆弟の子婦が總麻の報を受けることは疑義のないところであり、外孫婦も、その夫が報を受けないでも、亦報を受けることは政和礼、開元礼の示すところであり、古礼かくの如くであったと思われる。

ウ、夫の世叔父母より受ける服

總麻章「夫之諸祖父母報」の考察は以上の通りである。この中に父母世代たる従祖父母がが含まれるか否かは問題とされるが、夫の従祖父母がその対者たる従父昆弟の子の妻に總麻の報をすることは、まず問題の無いところである。又、父母世代たる族父母の場合、夫が族父母に対し總麻であるから、妻は一等を降して無服であるから、当然夫の族父母がその対者たる従祖昆弟の子の妻に対しては服はない。それでは父母世代の残りとして、夫の従父とその妻即ち世叔父母がその対者たる昆弟の子の妻に対してはどうか。この場合でも喪服経に明文はなく、而も亦色々議論がある。夫の世叔父母に対する服については、大功章に「夫之祖父母世父母叔父母」とある。夫の世父母叔父母がいかな

る服を以て昆弟の子の妻に服するか、或は報ずるかは、経も伝も記していない。夫の祖父母が対象たる孫の妻に対しては、総麻章に「庶孫之婦」として明白に記されている。直系の子孫の婦はその夫のものより二等降されており、夫の父・祖との間に報はない。大功章において夫の世父母叔父母は祖父母と連記せられており、祖父母が報じないのであるが、世父母叔父母は、実は報であるが報の字が使用せられなかったのか、或は実に報がなかったのであるか。

この問題に入るに先立って世叔父母と昆弟の子との間の喪服について一言の必要がある。

不杖期章「世父母叔父母」伝「世父叔父何以期也、与尊者一体也、然則昆弟之子何以亦期也、旁尊也、不足以加尊焉、故報之也、中畧、世母叔母何以亦期也、以名服也」

同上章「昆弟之子」伝「何以期也、報之也」、注「檀弓曰、喪服、兄弟之子猶子也、蓋引而進之」

同上章「夫之昆弟之子」伝「何以期也、報之也」

上の様に世父母叔父母と昆弟の子、夫の昆弟の子との間の相互服が、経文のみによっても記されているが、更に伝がこれらが相互服であることを一々示している。ところが「昆弟之子」の賈疏は、「世叔父為之、此兩相為服、不言報者、引同己子、与親子同、故不言報、是以檀弓為証、言進者、進同己子故也」と言い、「夫之昆弟之子」の条の賈疏は、「世叔父は本来父の一体であり、昆弟の子を引上げて己の子と同じくするのでから報と言うを得ず、世叔母は本来路人で、それに対し昆弟の子は母名あるにより期に服するから、二母は報ず」と言う。夏燮も之によって、「引いて之を進めるのであれば報服ではない。『昆弟之子』の伝に『報之』とあるのは誤衍である。その理由は、1.『昆弟之子』の条の注は伝の報を釈かずして檀弓を引いて証し、且、伝を破らない。2.賈疏も、報でないが故に注が檀弓を引いて証するのである、と言う。3.『夫之昆弟之子』の疏も世叔父が昆弟の子に報ぜざる旨を述べている」と言う<sup>41)</sup>。然し世叔父に対し尊加であっても、世叔父はあくまでも旁尊である。伝も「旁尊也、不足以加尊焉、故報之也」と言う。

さて、夫の世叔父母に対する服は大功であるが、その反服は経に見えない。世叔父母が昆弟の子並びに夫の昆弟の子の妻に対する服については、更に議論が噴出している。説は三つある。無服説、小功説、大功（報服）説である。

無服説 程瑤田がこれを言う。昆弟の子の妻に対

する服は報服大功であるべきだが、経には見えない。その理由は服すべからざるが故である。何故か。父母は適婦に対して大功、庶婦に対して小功、祖父母は孫婦に対しては総麻である。もし昆弟の子の妻に対し報服大功とすれば適婦と同じであり、己の子の妻よりも重い。小功とすれば己の子の妻と同じであり、総麻とすれば孫婦と同じである。何れにしても不当である。故に無服である<sup>42)</sup>。

小功説 大功章「夫之祖父母世父母叔父母」の条の賈疏に、「夫之祖父母世父母為此妻著何服也、案下総麻章云、婦為夫之諸祖父母報、鄭注謂夫所服小功者、則此夫所服期、不在報限、王肅以為、父為衆子期、妻小功、為兄弟之子期、其妻亦小功、以其兄弟之子猶子、引而進之同己子、明妻同可知」と見える。王肅の言うところは、先の昆弟の子が猶子であるため世叔父母はこれに対して引いて進めて己の子と同じくして報ぜず、と同じく、その妻に対しても庶婦と同じく小功であると言うもので、賈疏もこれに従うのである。鄭珍も同じである<sup>43)</sup>。

大功報服説 李如圭は言う、「夫之祖父母世叔父母、夫皆服期、故妻從服大功、為昆弟子夫之昆弟子之妻之服、経無文、按下経為夫之姑小功、為夫之諸祖父母總、皆言報、則夫之旁尊於卑者之婦、皆報之、不盡出耳、王肅以為与旁（胡培翬引いて衆に作る）子之婦同服小功、非旁尊報之例也」と<sup>44)</sup>。敖繼公、沈彤、胡培翬、張錫恭等、これに従う者が多い。

以上三説の言うところ、それぞれに理由があるが、先にも触れた様に、凡そ喪服において純粹の家族上の身分関係において一方のみが服し対象が無服であることは、直系子孫の婦に対しては別として、ないのであり、旁系親間では相互同等を大原則とする。程氏は経文にないこと、昆弟の子の妻に服した場合、己の子の妻に対するとの差がなくなるとの見地から無服と見るのであるが、それは如上の相互同等服の大原則を忘れたものであって従い難い。夫の諸祖父母が報ずるの服は、己の孫婦に対するのと同じであって、旁親と正統と同じであることもある。張錫恭も指摘しているように、程氏自ら、その「夫之昆弟無服説<sup>45)</sup>」において「蓋旁親之服必彼此相報也」と言い、又、「為（夫之）世叔父母從服大功、二父母亦必報之以大功」と言い、更に又、「昆弟之子以期服我、我以期報之、其妻以大功服我、我以大功報之」とも言い、全く定見はないのである。小功説について見れば、まず賈疏が総麻章「為夫之諸祖父母」の伝の鄭注の「諸祖父母者、夫之所為

小功、従祖祖父母云々」に拠って、「夫が期に服するものは報の限に在らず」と言うことについては、注は、諸祖父母には夫が小功に服すると言ったまでのことで、夫が期に服するものは報の限にないということにはならない。次に王肅は、「父は衆子のために期、兄弟の子のために期であるから、兄弟の子の妻のためには衆子の妻のためと同じくすべきである」と言うのであるが、子とその妻のためには尊降するのであるが、兄弟の子とその妻のためには不杖期章「世父母叔父母」の伝にあように、世父母叔父母は旁尊であり、尊を加えるに足りないのであり、昆弟の子に対して報するのである。ましてやその婦に対しては一層のことである。張錫恭によると、旧唐書礼儀志(四)に魏徵等の奏文があり、子婦に小功、兄弟子婦に大功であるのは不合理であると述べられている。故に唐以前の旧制は、兄弟の子婦に対し報大功であったのである。己の子婦を軽んじて昆弟の子婦を重んずるようではあるが、その実、己の旁尊を以てしては降すを得ないからである。この思想は公妾大夫妾が子を降すを得ずして本服を遂げるのと似ている。

エ、小功章に「夫之姑姉妹娣姒婦報」なる文がある。娣姒婦とは、伝に「弟長也」とあり、鄭玄は、「兄弟之妻相名也、長婦謂稚婦為娣婦、娣婦謂長婦為姒婦」と言う。兄弟の妻相互が長幼によって相手を娣婦・姒婦と称するのであるが、長幼とは婦人相互のそれか、婦人の夫（兄弟相互）の長幼か。賈疏は婦人相互の年齢に拠るものとしているが、これは果して鄭注を釈いたことになるのか疑問である。馬融は、「娣姒婦者、兄弟之妻相名也、長稚自相為服、不言長者、婦人無所專、以夫為長幼、不自以年齒也」と言う<sup>46)</sup>。これは夫の長幼によるのである。鄭玄の言うところも大方同じであろう。胡培翬は賈疏を誤りとしており、これに同説の者が多い。胡氏に従うのがよい。娣姒姒婦は本来無服である筈だが、伝は「何以小功也、相与居室中、則生小功之親」と言う。

さてこの条では夫の姑に対してその姪婦（即ち彼女の昆弟の子の妻）の服、夫の姉妹に対してその昆弟の妻の服、兄弟の妻相互（即ち娣姒姒婦）間の相互の服の同等が示されているのであって、先に述べた来嫁婦と夫の党との間の様には別に欠落したものはない。報ずるのは此等相互である。馬融は、報とは姑が姪婦に報ずるのであるとて、姑のみに繋けて言うが、夫の姉妹も当然繋かるものであり、娣姒と言うは対者相互が示されているのであるから、報と言わなくてもわか

るが、本条ではこれも報に繋かる。李如圭は、「報とは夫の姑姉妹が報するのである、娣姒婦と言えは相互に服することは自ら明かである」と言う。総麻章「為夫之従父昆弟之妻」にも報と言わない。言わなくても相互服することは自明である。敖繼公も娣姒亦報と述べている。問題の点は鄭注の「夫之姑姉妹不殊在室及嫁者、因恩輕、畧從降」に関するものである。まず、「因恩輕畧從降」とはいかなる義であるか。胡培翬は「今因恩輕、不分在室及出嫁、一從降服小功之例服之、是畧也」と言う。その言う所、固より誤りではないが、降服小功は出嫁降服のことであり、通典では、鄭注は「因恩輕畧從嫁降」とあり、段玉裁や張錫恭がこの点を指摘している。夫は姑姉妹のために正服は期、出嫁降服大功、妻は従服して夫より一等を降すから、姑姉妹の在室に正服大功、出嫁小功となる筈であるが、妻と夫の姑姉妹とは恩が軽い（同室する期間が短い、或はない）ので、在室も出嫁と同じく降すのである。

次に鄭玄が「夫姑姉妹不殊在室及嫁者」と言えば在室と出嫁と共に服があるのであるが、程瑤田は次の様に言う。「夫の姑姉妹のための服は皆在室であり、出適すればそために無服である。何故ならば、伝に『娣姒婦者弟長也、何以小功、以為相与居室中則生小功之親矣』と言う。だから出適して同室でなくなれば、無服となる」と<sup>47)</sup>。けれども胡培翬も述べているように、総麻章「為夫之従父昆弟之妻」の伝も「何以總也、以為相与同室則生總之親焉」とあり、本来無服である従父昆弟の妻相互が同室の故に總を服すると言うもので、小功章の伝と同じであるから、小功章の場合の伝の言うところの小功の親を生ずるとは、専ら娣姒婦の場合のことであると考えられる。夫の姑姉妹は出適すれば同室でないから無服となる、ということにはならない。

夫の姑姉妹のための服は、夫が服するが故の従服であり、同室の故ではない。だが、程瑤田が夫の姑姉妹のための服が在室であると言うことについては、それなりの理由はある。程氏によると、総麻章に「夫之姑姉妹之長殤」とある。喪服経中諸婦人の長殤のための服は皆それが出適した場合の正服と同じである。だから夫の姑姉妹の長殤のための総麻服は、それが成人して出適せる場合の服と同じである。すると夫の姑姉妹のための小功服とは、それが成人在室の服であることになる。成人在室の服が必ず長殤服に一等加わった服であれば、婦人逆降の事もないことは明白である。以上の程説について、逆降のことは別に又大きな問題を蔵するものであり、かつて拙稿においてこれを論じた



ことがある<sup>48)</sup>。今は夫の姉妹のために在室か出適かに限って見よう。夏燮は言う、「男子はその姉妹の在室に期（経に文なし）、出適を降して大功（大功章）、この男の妻は夫に従って一等を降す、その小功なるは出適であるからである」と<sup>49)</sup>。

男が姉妹出適者に大功なることより推せば、妻が夫の姉妹のために在室大功、出適小功であることになり、夫の姉妹の長殤のための細麻より推せば、在室小功、出適細麻であることになる。鄭玄は「経が在室と嫁とを分けていないのは恩が略であるから在室も嫁降服に従うのである」と言う。夫の姉妹に対する妻の服が在室の服である（程氏）のであれば、段氏が言う様に、姑や姉妹は、姪の妻や昆弟の妻に己が在室中に服する或は報服することは稀である。服するのは出適してからのものである。だから夫の姉妹に対する小功は、夫に従って服するものであり、出適した者に対してである（夫は姉妹出適に対して大功であるから）。在室の服は殆んどないから、それは略して出適の降服に従うのである。その長殤のために細麻服であることよりして、在室が小功であることになり、この小功は、明らかに夫の在室姉妹に対し、夫の不杖期なるを降して大功とすることとは合わないが、上述した様に妻は夫の姉妹の在室と相互に服することが少ないために、在室をも略して出嫁服に従ったとすることに合うのである。夫の従父昆弟の妻が細麻章におかれて、伝が亦「相与同室則生細之親矣」、と釈き、夫の従父姉妹に対する服が開元礼<sup>50)</sup>において従父昆弟の妻と同じく細麻で、適人と在室と同じとせられている（胡培翬は夫の従父姉妹に対し無服とするが<sup>51)</sup>、張錫恭がこれを誤りとしている<sup>52)</sup>）ことを参照して、夫の姉妹についての鄭注が適当であると考えられるのである。

c 大功章に「女子子適人者為衆昆弟姪丈夫婦人報」とある。この経文の読み方については次の様に色が考えられる。

I 女子子出適者が「衆昆弟」及び「姪丈夫婦人」に服する。

姪丈夫婦人が報ずる。

II a. 女子子出適者が「衆昆弟及び姪」の丈夫婦人に服する。

「衆昆弟及び姪」の丈夫婦人が報ずる。

b. 女子子出適者が「衆昆弟」及び「姪丈夫婦人」に服する。

「衆昆弟」及び「姪丈夫婦人」が報ずる。

III 女子子の出適者が「衆昆弟及び姪」のために報ずる。

以上 I と II とにおいて女子子出適者が衆昆弟と姪とのために服すると読むのは同じである。I と II との相違は、報が姪だけか、衆昆弟も含むか。又、丈夫婦人が姪だけに繋がるか、衆昆弟にも繋がるか、である。III は夏燮の読み方であるが、これは、報服は必ず尊者が卑者に対してのものであるとの考えによるのであるが<sup>53)</sup>、はじめに述べた様に、報服は概ね尊者より卑者に対するものであるが、これは鉄則ではない。杖期章「父卒継母嫁従為之服報」不杖期章「為人後者為其父母報」同上章「大夫之子為世父母云々唯子不報」大功章「女子子適人者為衆昆弟姪丈夫婦人報」において、此等は皆、某為某報の形をとっているが、はじめの三例は何れも為字の下に被服者が報者となっている。この事から最後の例の大功章の報者も衆昆弟姪丈夫婦人であると読むのが適当であると思われる。不杖期章の「大夫之子為世父母云々唯子不報」において、昆弟の子が世叔父母に報ずるとの文を構成しているのである。然し本論のはじめに述べた様に、大功章の場合、この条に関係深いものが大功章首条に「姉妹女子子適人者」とあり、出適女子とその対者との間の報は、報字がなくても明白である。大功章の両条を併照すると、報字がなくても女子子出適者が報ずると解せられるから、ここの報は特別の意味がある様である。I 読と II 読との相違の、報が出適者とその姪との間だけか或は出適者とその衆昆弟及び姪との間かについて、姪との間のみとすると丈夫婦人は姪のみを承けることになるが、報が衆昆弟と姪との両者に及ぶのであるとすれば、丈夫婦人はその両者を承けるとの読み方も成り立つ。鄭玄は「為姪男女服同」と言い、馬融は「適人降其昆弟、故大功也、嫁姑為嫁姪服也、俱出也」と言う<sup>54)</sup>。両者ともに婦人を姪のみにかけて I の読み方を為しているものと思われる。徐乾学は、馬融を II 読と見ているが、そうではない。清儒で II 読を為している者がかなり居る。程瑤田<sup>55)</sup>、徐乾学、盛世佐等である。I 読に従う者は、鄭珍、胡培翬、張錫恭、黃以周<sup>56)</sup>等である。女子子出適者と衆昆弟との間は言うまでもなく相互大功であり、姪との間も同じであるから、「女子子適人者」から下の報までを一条として読んで（II 読）差支えなさそうであるのに、いかなる理由で二条（I 読）とすべしということになるのであるか。胡培翬は、盛氏が婦人を以て女昆弟及び姪女なりとするのに反対して、「丈夫婦人が衆昆弟にかかることはない。喪服経伝に



において、男においては昆弟と言い、女においては姉妹と言う。女昆弟の称はない。丈夫婦人は姪のみにかかるのである」と言い、鄭珍は、「衆昆弟が女子出適者に対する服はすでに大功章のはじめに見えている。この経の報が衆昆弟を承けることはない。大功首条に『姑適人者』とあり、この経の報が姪を承けることもなさそうであるが、大功首条の姪は男子のみで、女子子を兼ねない。故にこの経の姪は男女を兼ねて報と言うのである」と言い、敖繼公に至っては、「この経の姪丈夫婦人のためにする服は、大功首条『姑姉妹適人者』と表裏しており、報であることはこの両経でわかるのであるから、ここの報字は不要である」と言う。敖繼公の言う様に報字はなくてもよいが、ここの報は特別の意味をこめているのではないかを考慮すべきである。

女子子適人者が衆昆弟ならびに姪との間において相互同服をつけることには異論はない。重要な点は姪丈夫婦人（胡培翬説の、婦人は姪だけに繋がるの見解に従う）の姪が在家か出適かである。鄭玄は「為姪男女同服」と言う。胡培翬は「鄭意謂、女子子在室与男同、然已嫁者亦不降也、李氏云、言婦人者、明已嫁者与在室之服同云々」と釈いている。姪女が在室でも出適でも、出適せる姑との間の服は同じである。その服が何故姪男と同じであるのか。この経において姪に対するものは衆昆弟が対するのと同じ女子子出適者即ち姑の出適者である。身分関係の上からすると衆昆弟と同じであるのは姪が在室の場合である。ところが鄭玄の意は、李如圭が釈くところでは、姪の在室と出適とが同服である。馬融も「嫁姑為嫁姪服也」と言う。勿論これも在室と出適と同服の上でのことであるが、特に嫁姪と限定したわけは、この経の報は特に出嫁姪に対してであることを示すものであるからである。張錫恭は言う、「大功章の首条に姑適人者とあるのは、姪男姪女がこれに服するのであるが、姪女は在室である。だから姪丈夫婦人報の婦人は嫁姪である。在室姪女は姪男と同じく出適の姑に対しては本服期を一等降して大功とするが、姪が出適した場合は更に一等を降して小功とするかと思われるが、実はそうではなくて出適姪も一等を降すだけであることを示すために報としたのである。報は、はじめ出嫁姪のために設けられたものであるが、作文の勢として、丈夫、在室女も含まれると解してもよい」と。両女共に出嫁した場合、相互に再降はしないことを示すためにここに報字が設けられたと見ることが可能である。両出不再降のことに

いては、大功章の「大夫大夫之妻大夫之子公之昆弟為姑姉妹女子子嫁於大夫者」について程瑤田が指摘しているところであり<sup>57)</sup>、大夫の妻とその姑姉妹で大夫の妻となる者相互が大功であるのは一降されただけであるからである（程氏によると、両出の降例が見られるのはこの大功章大夫之妻云々の例だけである）。

付 丈夫婦人の称について

姪丈夫婦人が姪男姪女であることは自明であるが、姪女を婦人と称したのは何故か。李如圭は「言婦人者、明已嫁者与在室之服同之云々」と言う。婦人とは已嫁者を主として示すのであるというわけは、在室女ならば女子子の称が使用せられるのが普通であるからである。

喪服経文中、丈夫婦人の称は四ヶ所ある。齊衰三月章「丈夫婦人為宗子宗子之母妻」大功章「女子子適人者為衆昆弟姪丈夫婦人報」小功殤章「為姪庶孫丈夫婦人之長殤」小功章「從母丈夫婦人報」である。鄭玄は齊衰三月章の婦人に注して、「女子子在室及嫁婦宗者也」と言っており、在室女と出嫁女とをかねた称と見ている。大功章「姪丈夫婦人」の注の意はやや明白を欠くが、李氏は釈いてやはり出嫁女と在室女とを兼ねたものと見ている（上述）。馬融は齊衰三月章の丈夫婦人に注して「一族男女」と言う<sup>58)</sup>。この一族の女の中に来嫁が含まれるか否か。王肅<sup>59)</sup>、雷次宗<sup>60)</sup>の述べるところでは、皆、来嫁婦は含んでいないものと思われる。ところが敖繼公は、「婦人者謂絕族之女子子在室者及宗婦也、丈夫婦人於宗子宗子之母妻、若在嫂叔之列者、不服」と言い、盛世佐も亦来嫁婦を含んでいるとし、更に、嫂叔関係の者でも服すると言う。敖繼公に対し張錫恭は異姓である者がどうして宗子に服することがあろうと評し<sup>61)</sup>、程瑤田も、婦人は同姓の在室であると言い<sup>62)</sup>、鄭珍も異姓を含まず、在室と已嫁とを兼ねると言っており<sup>63)</sup>、述べる所甚だ詳密である。なお、大功章の馬融注は、「嫁姑為嫁姪服也」として出嫁者として釈き<sup>64)</sup>、小功殤章の注は「言丈夫婦人者、明姑与姪、祖与孫疏遠、故以遠辞言之」と言う<sup>65)</sup>。遠辞とは、子、女子子に対してよりも一層遠くに身分関係を及ぼした辞ということであろう。小功章「從母丈夫婦人報」についての賈疏引馬融は「從母報姉妹之子女也、丈夫婦人者異姓無出入降也」と言う。通典（凶礼十四）引の馬融注はこの下に更に、「皆以丈夫婦成人之名名之也」とある。小功殤章におけるものは殤死した丈夫婦人であるから必ずしも丈夫婦人が成人の名であるとは言われない。ただ、「異姓無出入降」

(従母とその姉妹の子は相互に異姓であるが故に、姉妹の子たる女が在室でも出嫁でも服が同じである。勿論従母の在室と出嫁の場合も同じ)と言うのは、姉妹の女子中に在室と已嫁とを兼ね含んでいる。婦人の中に異姓を含むと言うのではない。(礼記大伝篇従母六の中の四に出入があるが、出でて降すのは本来同室であって、そこから出る者に対して一等を降すのである。従母や従母姉妹や舅の女や姑姉妹の女は本来同室ではない。故にこれ等に対して出降ということはない。)

以上を要するに、丈夫婦人と称した場合、婦人は、女子子が父母の子の在室者であるのに対し、一族中の更に広い身分関係の女で、在室も出適も含めた場合のことである。

- d 不杖期章「大夫之子為世父母叔父母子昆弟昆弟之子姑姉妹女子子無主者為大夫命婦者唯子不報」について

この経文は通典(凶礼十二)では「姑姉妹女子子無主者」の部分「姑姉妹女子子適人無主者」となって適人の二字が多く、劉師培は非經の故本として、これについて解釈を読んでいるが<sup>66)</sup>、経文においてこの部分の下に「為大夫命婦者」とあって、姑姉妹女子子が大夫に嫁した者であることは伝文でも明示しているから、適人(喪服経では士に適切)はこれと矛盾している。通典(凶礼二)引の漢石經礼議によるも本経に適人の字がない。鄭玄本、玉肅本<sup>67)</sup>にも無い。従って大夫命婦は世父母以下を統べ、無主は命婦を指すとの鄭注に従うことができる。

さてこの経文の「唯子不報」について、伝は「何以言唯子不報也、女子子適人者為其父母期、故言不報也、言其余皆報也」と釈いており、鄭玄はこの伝文を難じて、「唯子不報、男女同不報爾、伝以為主謂女子子、似失之矣」と言う。鄭玄の言うところに誤りはないが、男子は父に対して斬衰であるが故に、これについては初めより問題はない。唯女子子の命婦無主者と父母との間では相互に同服である。大夫の子は、その女子子が士に適げば出降の上に更に父の尊によって降す故に小功であるが、大夫に嫁したるが故に出降があるのみ、且、無主であるがため憐んで不杖期とする。女子子は出嫁すれば父のために本服不杖期に服し、たまたま父が己に服するのと同服であるが、これは報の故ではないが、報であるに嫌らわしいので伝が特にこれを取り上げて説明したもので<sup>68)</sup>、と見ることが出来る。伝が経文を誤って解釈したのではない。経の「唯子不報」に

についての伝文及び鄭注の趣旨については諸説ほとんど一致するのであるが、郭明昆は別に次の様な解釈をしている。「喪服篇において、子は女子子に対するものであり、且、本条においても世父母、叔父母、子、昆弟、昆弟の子、姑、姉妹、女子子と列挙せられていて、子と女子子とが区別せられているのであるから、唯子不報の子は女子子とは別のものである、子は父と喪服相互同等ではないが、この場合女子子は報であり得る。伝は過分の礼に報いるために同等の服を以てするのが報だと考えた。然しそれでは次の二例の説明がつかない。大功章女子子適人者為昆弟姪丈夫婦人報(卑属が報ずるもの)、小功章従母丈夫婦人報(尊属が報ずるもの)」<sup>69)</sup>。郭氏説は以上の様であるが、女子子が父に対しては不杖期であることが果して父との報関係にあるものであるか。齊衰不杖期章に「姑姉妹女子子適人無主者、姑姉妹報」の文がある。これは「大夫之子為世父母(中畧)姑姉妹女子子無主者為大夫命婦者、唯子不報」と極めて似ており、相違する点は服者と被服者が共に士の身分であるのと、大夫の身分であるのとである。士の身分の場合において、姑姉妹女子子の中の女子子だけは報の域外におかれている。すると大夫の子の条における女子子も同様であり、唯子不報の中に女子子も含まれているのである。大功章の初めに「姑姉妹女子子適人者」がある。本服不杖期であるのを降して大功とする。出適せる姑姉妹は宗家の姪及び昆弟に対して同等服を以て報ずる。大功章「女子子適人者為衆昆弟姪丈夫婦人報」がこれである。この場合も亦女子子が除かれている。それは、女子子は父母に対して不杖期であるからである。昆弟と姉妹との間では相互に不杖期であったり大功であったりであるが、女子子と父との間では、女子子は父より不杖期或は大功小功を受けることはあっても<sup>70)</sup>、父に対しては、出適女は常に不杖期であり、相互に不杖期の同等なる場合でも報ではないのである。郭明昆の意見には従い難い。

この条で問題であるのは報不報のことよりもむしろ大夫の子とその昆弟との間の喪服関係であり、この条と大功章「公之昆弟大夫之庶子為母妻昆弟」との関係である。大功章大夫の庶子がその昆弟のためにするの条のその大夫の庶子とは、昆弟服を示す場合に限り、適長子を除いたものすべてを言うものであり、不杖期章「大夫之庶子為適昆弟」の伝の鄭注「適子為庶昆弟、庶昆弟相為、亦如大夫為之」における「大夫之庶子」と同じく、「大夫之子」とほとんど同じである。大夫の庶

子が昆弟のために大功である場合の大夫の子とその昆弟の身分は何であるか。大功章の「大夫之庶子」の条の直上に、「大夫為世父母叔父母子昆弟昆弟之子為士者」の文があり、大夫は、子、昆弟の士たる者を尊降して大功に服するが、大夫の子はその昆弟や姉妹女子子に對し父大夫と同じ服を着る者である。このことは、大功章「大夫大夫之妻大夫之子公之昆弟為姉妹女子子嫁于大夫者」小功殯章「大夫公之昆弟大夫之子為其昆弟庶子姉妹女子子之長殯」からも判断することが出来る。大夫が子や昆弟の士たる者に対し大功であるなら、大夫の子も昆弟の士たる者に対し大功である（上述の様に適昆弟に対してだけは別である）。不杖期章大夫の子が昆弟の大夫たる者に対して不杖期であることもこれに即応している。

ところで不杖期章大夫の子は、盛世佐、胡培翬の言う様に適庶を兼ねるものであるが、それが大夫の身分であるか士の身分であるかは示されていない。大夫の身分でも士の身分でもよいのか、或はどちらかでなければいけないのか。盛世佐は、「大夫之庶子相為大功、今報以期者、尊与父同、故得遂也」と言う。これは大夫の子が昆弟の大夫たる者と同じ尊位にある者と見る。張錫恭も、「大夫為大夫之子、雖為士者不降而報之也」と言う。その言うところの大夫とは昆弟の大夫たる者であり、大夫の子の士たる者と雖もとは、本条經文の主語たる大夫の子である。だから胡培翬と同じく大夫の子は大夫の身分でも士の身分でもよい。張氏に従えば、大夫の子が士である場合、その昆弟の大夫たる者に不杖期に服する。この大夫は士たる昆弟に対し尊降せずして報いる。かくして大功章の「大夫之庶子為母妻昆弟」は大夫庶子（上述の様に對昆弟關係では大夫の子と言うに同じ）の身分は大夫・士の何れか示されていないが、この庶子かその昆弟かの何れかが大夫の身分であるときは、子の士である者は、己は父よりは尊降せられて大功であるのに、昆弟相互は不杖期を以て服する。従って大功章大夫庶子の条は庶子もその昆弟もどちらも士たる身分であることになる。だが問題が残る。伝が「父所不降子亦不敢降」と言うものに四条がある。この伝によるなら父の降すところに従って子も亦降すことになる。（大功章「大夫庶子」の条の伝も、「大夫之子庶子則從乎大夫而降」と言う。但し、この「得乎大夫而降」が母妻の場合であることは確かだが、昆弟相互の場合も同じであるか否かは疑問である<sup>71)</sup>）。通典（凶礼十五）諸侯大夫子降服議において田瓊は、「喪服經不見大夫嫡子為庶昆弟服者、与大夫為

庶子為士者同、父之所降不亦不敢降也」と言い、譙周は、「大夫之子、父在降旁親、亦如大夫、從父庄也」と言い、徐整は、「大夫之子從乎大夫而降、至於父卒如國人也」と言う。大夫の子に大夫の身分と士の身分との両者ある時（これが可能であることは、不杖期章「大夫之子」の条に昆弟に大夫たる者があること、大功章「大夫服」の条に子の士たる者があることによって知られる）、その大夫の身分の者は父に従って昆弟の士の身分の者を降して大功とし、又、昆弟の大夫の身分に對し父に従って降さずして不杖期とすることになる。すると不杖期章の大夫の子とその昆弟の大夫たる者との間の不杖期の報が可能であるためには共に大夫の身分でなければならないのである。この事について張錫恭は、「或曰、大夫之子為昆弟之非適者大功、彼昆弟亦大夫之子也、而昆弟為之大功、則大夫之子自有降之之例矣、而此報之何也、曰大夫之子為昆弟大功、伝固曰從乎大夫而降也、自以庄降、非以尊降也、若大夫命婦之降与不降、則当以尊論、夫為降之品不同、其或降或不降、各有攸当、不得執彼以例此也、明庄降不可例尊降、則其誼瞭然無疑矣」と言う。この「或曰」が疑問としていることは、大夫の子とその昆弟は共に大夫の子であり、且、両者共に適ではない。すると不杖期章「大夫之庶子為適昆弟」の伝注にある様に、この両者は相為めに大功であって相互に降している。ところが同じ不杖期章「大夫之子為世父母云々」では大夫の子と昆弟大夫たる者との間の報を言う。これは何故か。これについて張錫恭の答えは、「大夫の子が相互に降して大功であるのは父に従っての庄降である。大夫命婦の降不降は自己の尊によるもの（尊が己と同じでなければ降し、尊同じであれば降さない）で、庄ではない。両者は別のもの」である。張氏のこの答えは庄降と尊降との差があることを述べ、この限りでは納得できるが、不杖期章「大夫之庶子為適昆弟」の伝注の「適子為庶昆弟、庶昆弟相為亦如大夫為之」と、同章「大夫之子云々報」との關係を闡明していない。「庶昆弟相為亦如大夫為之」であるならば昆弟の士たる者に対し大功であって、このことは士たる者をも降さずして不杖期で報いるとの張氏の上述の言と矛盾するのである。矛盾なからしめるためには、前者の庶昆弟は皆士たる者、後者の大夫の子及び昆弟は皆大夫たる者、であると見なければならない。夏燮が「若大夫以上、兼尊降之例者、必尊同而後有報例、如不杖期章大夫之子為六命夫六命婦、是也」と述べる通りである<sup>72)</sup>。

張錫恭は大夫の子がその旁親に対する降不降につい

て言うのに、「降は庄降である、大夫の子の尊ではない、大夫に従って降さないのであって自らの尊同の故ではない」と。然し大夫の子が昆弟（士たる身分）を降するのはその大夫の子が適子でも庶子でも同じことなのである。小功殤章「大夫大夫之子為其昆弟庶子姑姉妹女子子之長殤」の鄭注も、「大夫之子不言庶者、関適子、亦服此殤也」と言う。大功章の大夫庶子が母妻と共に昆弟をも降し、それが庄降であるとした場合、母妻に対する大夫庶子の庄降は疑義なきところであるが、衆昆弟に対する大功服は適子庶子に相違はないのであり、適子は庄を受けるものではないから昆弟に対する大功として庶子だけをここで挙げるのは不適當である。林喬蔭は「大夫の子が降するのは父に従って降するのであり、これは庄降とは無関係である」と言う<sup>73)</sup>。母妻に対しては庄が言えるのであるが、昆弟に対しては林喬蔭の言の如く大きな問題がある。

## 結 論

### (一) 報服の一般的原理

報服とは、家族・親族の成員相互が彼等の家族的身分関係上の親疏の度によって規定せられた喪服を着け合うとの原則の上で、一方が先に施し、他方が（現実にこれに報いることはあり得ないが、理念としては）これに報いるべきであることを示すものである。儀礼喪服篇では、A、Bの二人の相互の身分関係によって著用せられるべき喪服を示すのに、次の二様の書式を採っている。

ア。AがBに対しこの服を着用する。BがAに対しこの服を着用する。

イ。AがBに対しこの服を着用し、Bがこれに報いる。（又は、BがAに対しこの服を着用しAがこれに報いる。）

イの場合において、AがBにでもBがAにでもどちらでもよいのか、或はA、B両者の尊卑の関係によってどちらかにすべきであるか。喪服篇における諸例を総合して次の様に判断せられる。

1. 卑属が尊属に服し、尊属がこれに報いる。この逆の例は全くないことはないが、極めて稀である。
2. 報服は、直系親の尊卑間には存在しない。旁系親の尊卑間に存在する。
3. 旁系親の同輩間における相互同等服は、通常、報とは称しない。
4. 尊卑の関係においてのみ報があるのではなく、尊卑の間でも同輩の間でも、尊敬、出降、従服、

恩恵等の条件が加わって本来の服に軽重の変が生じて、相互にその変化した服を着用する場合の報がある。然し、此等の場合も尊卑間の報に還元せられることが多い。

### (二) 報服諸例中の問題点

1. 総麻親の族曾祖父母以下族父母は皆その対者たる昆弟の曾孫、従父昆弟の孫、従祖昆弟の子に報いる筈である。これらの旁系卑属に対する総麻服は、直系卑属たる曾孫、孫、子に対する本服からの旁殺によって得られる。

2. 夫の外祖父母に対する服は、夫がその外祖父母に対する尊加服を基としての従服であり、これを以て妻は報を受ける。

3. 夫の世叔父母に対する服も夫の尊加服を基としての従服であり、これを以て妻は報を受ける。己の子婦に対する服よりも昆弟の子婦に対する服が重くなるのは昆弟の子及びその婦に対し、己は旁尊であり、尊を加えることができないからである。

4. 夫の姑姉妹がその昆弟の子婦及び昆弟婦に対する小功服は在室か出適かの問題は、彼女達が同室する機会が出嫁の関係で極めて少ないため、夫の姑姉妹のための服が在室服を畧して出適服に従ったものと見られる。

5. 大功章「女子子適人者為衆昆弟姪丈夫婦人報」で重要なのは、姑と姪女とが共に出嫁した場合、再降するものではないことを示すことであると見られる。

6. 不杖期章「大夫之子云々唯子不報」では、「唯子不報」の解釈は伝の言うところが強ち不当ではない。この条の重要な点は大功章「大夫之庶子為母妻昆弟」との関係である。不杖期章「大夫之子」が報を受けるためには大夫の身分であるべきであり、大功章「大夫之庶子」は昆弟と共に士の身分であると見るべきである。

## 註

- 1) 牧野巽 支那家族研究 p. 141 （昭和十九年 生活社）
- 2) 程瑤田 儀礼喪服文足徴記卷四 報服挙例述（皇清經解正編所収）
- 3) 夏燮 五服釈例卷九（釈報服例） 尊加之服無報例（同治七年自序刊本）
- 4) 程氏上掲書卷四 報服挙例述
- 5) 夏氏上掲書卷九
- 6) 黃以周 喪服通故（礼書通故第九）三 夫党服

の条（光緒十九年定海黃氏試館刊本）

- 7) 吳廷華 儀礼章句喪服 第十一 總麻章族昆弟の条（皇清經解正編所収）
- 8) 夏燮が、姑姉妹在室の服は男子相為の服中に統べて報がないが姑姉妹出適すれば報あり、と言うのがこれである（上掲書卷九 婦人在室之服無報例）。
- 9) 張錫恭 喪服鄭氏學卷十 大功章夫之祖父母世父母叔父母の条（民國七年南林劉氏求恕齋刊本）
- 10) 程瑤田が喪の報服における両例を示している（上掲書卷四 報服舉例述）。
- 11) 広池千九郎 東洋法制史本論 p. 532（早稲田大学出版部 大正四年）
- 12) 程氏上掲書卷九
- 13) 郭明昆 中国の家族制及び言語の研究 p. 46（早稲田大学出版部 昭和三七）。
- 14) 夏氏上掲書卷九 旁尊之報服例 適人之報服例の条
- 15) 程氏上掲書卷四 報服舉例述
- 16) 武威漢簡（中国科学院考古研究所篇 1964年 文物出版社）
- 17) 夏燮上掲書卷九 外親從服之報例
- 18) 李如圭 儀礼集釈卷十七 婦為舅姑の条（光緒壬辰刊 恆校訂本）
- 19) 吳嘉賓 喪服會通説 卷二 婦人相為服因（皇清經解統編所収）
- 20) 拙稿 中国古代親等に関する一考察 三（親等）参看（日本中国学会報 第十八集 昭和 四一年）
- 21) 程氏上掲書卷四 喪服無逸文述
- 22) 盛世佐 儀礼集編卷 十一 之三族曾祖父母云々の条（嘉慶十年序刊本貯雲居藏板）
- 23) 鄭珍 儀礼私箋第七（皇清經解統編所収）
- 24) 程氏上掲書卷四 報服舉例述
- 25) 胡培翬 儀礼正義卷二四（皇清經解統編所収）
- 26) 鄭珍上掲書七、段玉裁 經韻樓集二（皇清經解正編所収）参看
- 27) 段氏上掲書に同じ
- 28) 程氏上掲書卷二 喪服經伝考定原本下
- 29) 褚寅亮 儀礼管見卷十一（皇清經解統編所収）
- 30) 沈彤 儀礼小疏五（皇清經解正編所収）
- 31) 徐乾学 説礼通考（康熙 三十五年 序刊冠山堂藏板）
- 32) 拙稿 儀礼喪服篇大功章に見える 庄降服に関する一考察（広島文化女子短期大学紀要 第十七号

1984)

- 33) 程氏上掲書卷九 鄭注夫之諸 祖父母条 転写譌字考
- 34) 許宗彦 張錫恭上掲書卷十四第八十九葉引
- 35) 夏燮上掲書卷九 從服之報服例
- 36) 敖繼公 儀礼集説 卷十一（重刊通志堂經解三礼所収）
- 37) 鄭珍上掲書七
- 38) 通典 礼九四（民國五二年台北新興書局發行）
- 39) 凌曙 礼説（皇清經解正編所収）
- 40) 劉師培 礼経旧説 喪服經伝 十一（劉申叔先生遺書甲類所収）
- 41) 夏氏上掲書卷九 世叔父無報例
- 42) 程氏上掲書卷八 夫之世叔父母大功不見報文説
- 43) 鄭珍上掲書六 大功章夫之祖父母世父母叔父母之条
- 44) 李如圭上掲書卷十八 夫之祖父母云々の条
- 45) 程氏上掲書卷六
- 46) 通典凶礼十四引
- 47) 程氏上掲書卷二
- 48) 拙稿 儀礼喪服篇大功章大夫之妾の条について（支那学研究第三十号 昭和四十年）
- 49) 夏氏上掲書卷九 從服之報服例
- 50) 通典 礼九四引
- 51) 胡氏上掲書 小功章夫之姑姉妹娣姒婦報の条
- 52) 張錫恭上掲書 小功章夫之姑姉妹娣姒婦報の条
- 53) 夏氏上掲書卷九 適人之報服例の条
- 54) 通典 凶礼十三引
- 55) 程氏上掲書卷一 喪服經伝考定原本上 卷四 報服舉例述
- 56) 黃以周上掲書 喪服通故三
- 57) 程氏上掲書卷一
- 58) 通典 凶礼十二引
- 59) 同上
- 60) 同上
- 61) 張錫恭上掲書卷八
- 62) 程氏上掲書卷九 丈夫婦人名称縁起説
- 63) 鄭珍上掲書五
- 64) 通典 凶礼十三引
- 65) 通典 凶礼十四引
- 66) 劉師培上掲書
- 67) 通典 凶礼十二引王肅説
- 68) 李如圭説参看（卷十七 大夫之子云々唯子不報の条）

- 69) 郭明昆上掲書 p. 49~53
- 70) 出適の女子子は大功を受けるが(大功章姑姉妹女子子適人者), そはに祭主がない(夫死し, 子がない) 場合は不杯期(不杖期章姑姉妹女子子適人無主者), 大夫の女子子が土に出適する場合は小功(小功章, 大夫大夫之子公之昆弟為姑姉妹女子子適人者)である。
- 71) 拙稿 儀礼喪服篇大功章に見える庄降服に関する一考察(上掲) 参看
- 72) 夏氏上掲書卷六 士之妻出降例の条
- 73) 林喬蔭 三礼陳数求義卷二二 唯子不報の条(嘉慶八年誦芬堂刊本)

### Summary

#### I. The General Principle of "Pao Fu" (報服: the ritual code of wearing mourning dresses for reciprocal purposes)

"Pao Fu" is the ritual code of wearing mourning dresses for reciprocal purposes between members of a family and their relatives according to the degrees of closeness in their kinship, that is if one member of a family group wears one type of mourning dress initially, then the reciprocator should choose the same type of it to wear for reciprocal purpose referring to the ritual code. Naturally this can not occur as a real situation because the reciprocator is not alive at the time when he/she has to wear a mourning dress for the reciprocal purpose, hence "Pao Fu" is ideal.

In the volume "Sang Fu" (喪服: mourning dress) of "I Li," the following two ways of dressing between two members (namely, A and B) of a family group depending on their relationship are described:

1. A puts on one type of mourning dress for B first, then B puts on the same type for A.
2. A puts on one type of mourning dress for B first, then B reciprocates to A, and vice versa.

In the second case above, a question is whether there is any rules to decide "A wears one for B first" or "B wears one for A first." Integrating many descriptions in the volume "Sang Fu," the writer concludes as follows:

1. A descendant wears one type of mourning dress for his/her ascendant first, and then the ascendant reciprocates to the descendant. The reversed cases are very uncommon.
2. "Pao Fu" can not be applied to the cases between lineal descendants and ascendants, and is only applicable to the cases between any two members in a collateral relation.
3. The cases in which any two of the same generation in a collateral relation wear the same type of mourning dresses are not applicable cases of "Pao Fu."
4. In a collateral relation "Pao Fu" is not only applicable to the cases between descendants and ascendants, but is also applicable to the cases like women leave from their parents' families to marry (in this case the levels of mourning dress are degraded one degree), or wives mourn for the losses of husbands' relatives (in this case the levels of mourning dress worn by the wives are also degraded one degree comparing to their husbands' levels if the relatives were ascendants), or the original levels of mourning dress are raised one degree considering the persons' respect and benefication. In many cases the most important factor in "Pao Fu" is the descendant-ascendant relation between any two members of his family group.

#### II. Peculiar Questions of "Pao Fu" in Practice

1. In the chapter "Ssu Ma" (總麻: the mourning dresses worn to enter 3-month period of mourning), there is a description of ego's mourning dresses for his ffb and ffbw (=ego's great-grandfather's brothers and their wives), for those relatives' sons and their wives, and for those relatives' grandsons and their wives. But there is no description of the mourning dresses worn by those relatives



for ego. Then a question will be whether they should wear the same types of mourning dress as ego wears for them.

The answer to this question will be found from the fact that the dresses worn by ego for his bsss, fbsss and ffbsss are inferable from what ego wears for his sss, ss and s according to the code of mourning dresses for lateral descendants.

2. In the chapter "Ssu Ma" there is a description of ego (female)'s mourning dresses for her husband's ff and fm, and also the mourning dresses those relatives wear for ego. Then a question will be whether there is a clear description about the cases of her husband's mf and mm. The answer to this question will be found from the fact that ego's mourning dresses for her husband's mf and mm correspond to her husband's raised-level mourning dresses to show his respect to them.
3. The mourning dresses which a wife puts on for her husband's fb and fbw also correspond to her husband's raised level mourning dresses, and these husband's fb and fbw wear the same type of mourning dress as their bsw wears for them for reciprocative purpose. In this case a question will be why the dresses for bsw are more important than the ones for sw.  
The reason of this will be that fb and fbw can degrade the levels of mourning dress for their s and sw having a superiority to them, but can not do so for their bs and bsw.
4. A husband's fsi and si put on "Hsiao Kung Fu" (小功服: mourning dresses worn to enter 5-month period of mourning) for ego (female) who is their bsw and bw. Then a question will be whether these dresses are worn at unmarried status or married status.  
The answer to this question will be that the husband's fsi and si who are not married scarcely live with ego at home, hence these dresses are worn at married status.
5. In the chapter "Ta Kung" an important question about the description of "d who is married puts on dresses for her b and bd, and they return" is why her b and bd who is married put on the same type of mourning dresses for the b's si and the bd's fsi.  
This description should be understood that it intends to indicate specifically a case of when fsi and her bd leave from their family to get married, hence they mutually degrade the levels of mourning dresses only one degree, not two.
6. The importance of the description of "sons of high officials put on mourning dresses for fb, s, b, etc., and only s and d do not return" in the chapter "Pu Chang Chi" (不杖期 mourning dresses worn to enter 1-year period of mourning) is its connection with the description of "'Shu' (庶: children borne by wives other than the chief wife) sons of high officials put on mourning dresses for their m and b" in the chapter "Ta Kung."

In these cases the sons of high officials also have to be high officials to fulfill the conditions of being able to receive the "Pu Chang Chi."